

Conference Report

学界情報 国際会議レポート

International Exhibition & Conference for Power Electronics, Intelligent Motion and Power Quality (PCIM-Europe-2010)

May 4 - 6, 2010, Nuremberg, Germany

2010年5月4日から6日までの3日間、ドイツのニュルンベルク国際展示会場で PCIM Europe 2010 が開催された。PCIM Europe は、毎年このニュルンベルクの地で継続的に開催されているという特色ある会議である。

開催地となったニュルンベルクは、バイエルン州においてミュンヘンに次ぐ第2の都市である。街の周辺に多くの工業地帯をかかえる工業都市でもあり、そのため大きな展示会場を持つ。街の中心部は、第2次世界大戦での破壊から中世の建造物が復元され、美しい古都の街並みを感じられる。また、音楽家リヒャルト・ワーグナーの代表作の一つである楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」の舞台として有名でもあり、その前奏曲は様々な演奏会で取り上げられている。

さて、PCIM Europe 2010 はニュルンベルク郊外の大展示場 Exhibition Centre Nuremberg で開催された。この学会の特徴は、非常に大きな展示会が併設されることにある。1万1千平米を超える広さを有する展示会場に、255社の展示がなされ、6千人を超える参加者を数えた。出展社割合としてはドイツ国内が40%程度であり、その他がドイツ国外からの出展となっていて、まさに国際的な色彩が強い展示となった。我が国からの出展企業も多数あり、最新のSiC半導体デバイスやアプリケーションの展示に目を見張るものがあった(図1)。

一方、会議の方であるが、5月3日からTutorialsが開催され、11のテーマが取り上げられた。その中でも“Power Electronics for Renewable Energy Systems”と題された発表は、今後更に注目されるべき新しいパワーエレクトロニクス分野の再生可能エネルギーについての内容であった。更に、4日から6日にかけてのOral Sessionsでは103件の論文発表が、また、Dialogue/Poster Sessionsでは78件の論文発表がなされた。基調講演では、“Energy Storage - State of the Art and Future Trends”と題してRWTH AachenのProf. D. Sauerから講演があった(図2)。電力貯蔵の分野において、新たなリチウムイオン電池の適用など興味深いものであった。この際の座長は、ETHのProf. Kolarである。更には、ABBのB. Jacobson氏により“HVDC Light Can Deliver 1,100MW”と表して講演がなされた。洋上設置の風力発電群から、特別高圧に昇圧された電力がDCケーブルを通して沿岸部へ大電力を輸送される新しい方式の提案があり、聴講者からも注目を集めた。

Dialogue/Poster Sessionでは、各セッションの座長がプレゼンターの発表を個別に聴視されており、同時に発表者や

参加者の質疑応答が活発に行われていた。PCIM Europeは、Dialogue Sessionにおいても熱心に討議される会議であることを感じさせられた。

折しも、アイスランドの火山再噴火のニュースが流れる中の開催であり、各国からの出席者は帰路を心配する場面もあったが、幸い今回の火山活動は航空機を止めるに至らなかった。

開催期間中、天候が不順であり古城を見学することができなかったが、また来年訪れたいと考えている。来年のPCIMは、やはりニュルンベルクで2011年5月17日から19日に開催予定である。



図1 展示会の様子



図2 会議の様子

西村 和則 (広島工業大学)
(平成22年6月1日受付)